

## 子どもとの出会いの中で学ぶこと ②

水 沼 昭 子

四月に入園した四歳児も少しずつ園生活に慣れて、自分の「遊び」や「場」をみつけ、安定しはじめる六月には、年長児にとっても年長としての気負いが、スウッとぬけて、本来のその子らしさを良くも悪くも出して来る。

そうした六月のある日、年長のH夫達数人が遊戯室の箱つきを占領して遊びはじめた。皆、「積木」と云う同じ素材を手にしながらも、各自、異なる遊びのイメージで積木を積んだり、並べたりしている。一つの、同じイメージの遊びをみつけ出す為の、又、遊びを一つのイメージにして行く導入の様なひとときがすぎる。その内、H夫の大声が遊戯室に響く。「ちがうってば!」「だめだぞ!」……やはりH夫らしいナと思う。

H夫は年少の頃から、自分中心で遊びや仲間選びしてしま

うタイプの子であった。ライダーごっこに夢中で、自分が主役をとらなければ遊べない。思うように仲間が動いてくれないと大声で「だめ!」「いれてあげない!」……が始まる。そして、仲間が遊びから離れて行くとつまらそうな表情でテラスを行ったり来たりする。一人っ子らしいのびやかな面と、自分の思いを上手に他に伝えたり、自分をおさえたりする事のが手な子であった。こうしたH夫の園生活での状態を、保育者が規制することではなく、遊びの中で、がまんしたり、思いの伝え合いをして行く様に、さらに仲間にはH夫の強引さだけでなく本来もつのびやかな部分を遊びの中で知らせたいと話した。

H夫たちの積木はやっと大きなマストを持った帆船になった。大小の積木をうまく使った甲板には、ままごとセットや

ソファのクッションまで持ち込まれている。この船のすぐ脇を、他の子どもに呼ばれて通りかかった私に声がかかった。

「あゝあそこに人がいるぞ」。マストの横で両手を双眼鏡のようにしてH夫がさげふ。思わず足下の積木の一つに飛び乗ると私もふざける。「たすけてくださいーい」H夫に手をふりながら助けを求める。「よおし、まってるろ」みんな、あの島に人間がいるぞ、いそいで行け」

H夫の命令でTとNが海に飛び込む。一瞬にして、遊戯室は大海原となり、私は漂流者となって彼等の遊びに加えられた。TとNが近づいてくる。「わたしおよげないんです」なさない声で私は訴える。「よし、まってる。みんな積木を用意しろ」船へむけてNが命令を出す。H夫たち、船上で待機する者がその命令に従ってN達のところに行く。「つみき、ならべろ、あわてないで」TやNのリードで私の立つ積木島の隣りへ、順々に積木が並んで、私は一步一步、船に近づき無事故出された。

TとNのリーダーシップはみごとだった。いつもH夫の強引さに押され気味であった彼等が、むしろ生々と、H夫に命令し、H夫も当然と云った表情で従った。今までH夫は遊び

を作り出すことよりも、遊びをこわす、トラブルを起す側に立つことが多かった。そしていつも、仲間から訴えられる側であった。この救出のプロセスは、H夫達の遊びのイメージに、同じ思いで出会う相手があった事で、彼等は遊びをひろげ、遊びを作り出す側に立った。

遊戯室で他の遊びをしながら、この一連のようすをおもしろそうにながめていた他の子ども達はきつと「おもしろい遊びしてるナ」と思うと同時に、H夫達の今までとは違った姿をみたに違いない。帆船の中で、喜々として、時にはTやNに従って遊ぶH夫の姿の中に、新しい成長をみる思いがしてうれしかった。

私達は一人の子どもの出会いの中で、時として「どうしてするの」「やくそくわすれたの」と向い合う。保育者の硬い対応や言葉ではなく、その時々、子ども達の内面をみつめて、彼等の何気ない遊びの中から新しい成長の芽と、乗り越えさせたい成長のステップをそれぞれ育て、乗り越えさせたいと、「積木島」から無事故出され、心からそう思った。

(千葉・愛隣幼稚園)